国際関連情報 Report from IASB

マクロヘッジ会計プロジェクト
―討議資料を執筆中―

ASBJ 専門研究員
IASB 客員研究員
山下 裕司（やました ゆうじ）

IASB マクロヘッジ会計プロジェクトについては、現在、ロンドンに常駐する同僚と手分けして、討議資料（Discussion Paper）を執筆中です。

新たなマクロヘッジ会計が想定している会計モデルは portfolio revaluation model（by risk）というもので、要は、中身が刻々と入れ替わるオープン・ポートフォリオとして管理されている金融資産（貸出など）や負債（預金など）を、ヘッジ対象とされているリスク（金利リスク）について再評価した上で P/L 認識し、一方でデリバティブズ（金利スワップ）は通常通り FVTPL で認識することによって、マクロヘッジ活動全体の状況を P/L のボラティリティーとして表現しようとするものです。アイデア自体は、極めてシンプルです。

しかしながら、マクロヘッジ活動の状況を表現する方法を、銀行などの実際のリスク管理活動に整合的なかたちで、実際に会計基準に落とし込もうとすると、考えなければならないことが山のように出てきます。Transfer Pricing, Prepayment Options, Core Demand Deposit Model, Libor Discounting vs. OIS Discounting, Internal derivatives, Equity Model Book, Pipeline Transactions など、横文字でしか表現しようのないリスク管理テクニックを、会計学あるいは会計基準の伝統的・正統的な見方とどのように折り合いをつけるかは、非常にチャレンジングな課題です。というより、それこそが、マクロヘッジ会計が必要とされた最大の理由です。とりわけ一番大きな悩みは、「リスク管理の本質を理解するためには、どのような情報が有益か」を巡って、人によって見方が大きく割れることです。銀行業にはバーゼル規制という強固な国際規制が課されていることもあり、世界的にみてビジネスモデルやリスク管理手法が比較的に標準化された業種だと思うのですが、それでも、実際にアウトリーチを実施してみると、銀行によって、経営が目指すものや細かなリスク管理手法に違いがあると感じます。また、何が有益な会計情報であるかを巡って、ユーザーと銀行の間にも温度差があるように思います。

このように、試練ばかりが目につくプロジェクトではありますが、新しい会計モデルを一から開発する作業は、それだけやりがいがあるということだとも感じています。質の高い討議資料の執筆に向け、一段と努力してまいりたいと思います。